

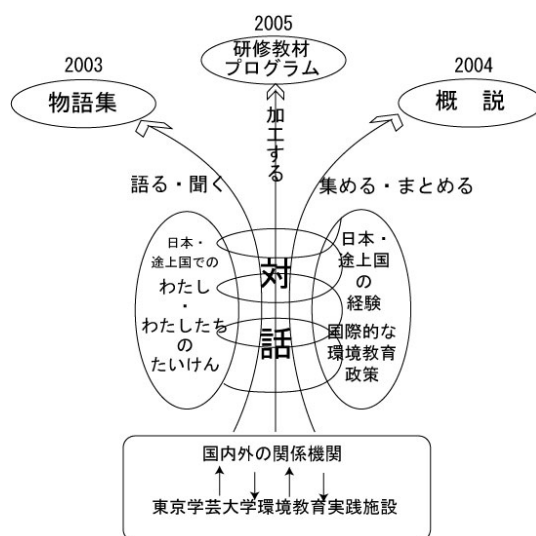
環境教育の教員研修にかかわる途上国との国際協力プロジェクト開発研究
 国立大学法人東京学芸大学 環境教育実践施設

事業の概要

国際的に、環境教育における教師教育（教員養成及び現職教員の継続教育・研修）は、環境教育界において最優先課題の一つとして認識されている。2005年から始まった国連・持続可能な開発のための教育の10年では、現行の学校教育制度を持続可能な開発に向けて再検討すること、並びに基礎教育が重要課題とされており、教師教育の重要性はますます高まってきた。

このような背景の下に2003年度には「途上国における環境教育にかかわる教師教育の現状とその国際教育協力のあり方に関する研究」としてこのテーマに関わる萌芽的研究を行なった。そして2004・2005年度では前年度の成果と課題を踏まえ、環境教育における教師教育の全体を視野に入れながら現職教員の継続教育・研修に焦点を絞り、「環境教育の教員研修にかかわる途上国との国際協力プロジェクト開発研究」を実施してきた。

事業の見取り図



2003年「語る・聞く」

ワークショップの実施（途上国の教員を対象にした環境教育研修とその国際教育協力）

『途上国の教員を対象にした環境教育研修とその国際教育協力 物語集』

2004年「集める・まとめる」

日本の環境教育と環境教育教員研修にかかわる経験を集約

途上国の教員を対象にした環境教育研修の国際協力プロジェクト形成のための調査

『日本の環境教育概説』『環境教育教員研修の見取り』『日本の環境教育教員研修』

2005年「加工する」

途上国教員を対象とした環境教育研修支援を行う国内関係者が活用できる研修教材の開発

『環境教育教員研修モジュール型教材』

環境教育教員研修モジュール型教材

研修教材のねらい

この研修教材は、途上国の教員を対象にした環境教育の研修に協力する国内関係者が、環境教育の基本的な考え方を学び、幾つかの具体的な活動のやり方を身につけ、さらに環境教育研修を企画することができるようになることをねらいにして作られている。

研修教材の特徴

- 1) 日本の環境教育と環境教育教員研修の経験をベースにして作られている。
- 2) 環境教育の考え方を学ぶ、環境教育のやり方を身につける、環境教育研修を企画する、という3つの内容を含んでいる。
- 3) 3つの内容領域の下に、10のモジュールが配置されている。一つ一つのモジュールは、単独で使うこともできるし、他のモジュールと組み合わせて使うこともできる。利用者の目的に応じた使い分けが可能である。モジュール11「環境教育教員研修用モジュール型教材を活用した研修プログラム」では、幾つかの用途に合わせたサンプルプログラムを例示している。
- 4) モジュールは、1 枠 90 分の研修時間を想定して作られているが、利用者の用途に応じて柔軟に使うことができる。
- 5) 環境教育とその教員研修の理解と実施に供するために、巻末に下記の補足資料を掲載している。
a)環境教育参照 URL 一覧、b)環境教育参考図書、c)『環境教育教員研修の見取り』、『日本の環境教育教員研修』、『日本の環境教育概説』、d)環境省・文部科学省共同作成の環境教育パンフレット

研修教材の目次

はじめに

概要「環境教育が立ち現われるところ」

I. 教育を学び・考える

1. 国際教育協力と国際社会における環境教育の現代的課題
2. 環境教育実践の振り返りと環境教育カリキュラムの開発
3. 環境教育実践とナショナル・カリキュラム
4. 基本的な環境ケア—子どもたちと何をめざすのか？
5. 〈語り〉からの教材編成：環境教育デザインのための一視点

II. 活動を考え・実践する

6. 地域環境を地図化する—まち歩きのおすすめ
7. 地域の自然環境を読む
8. 河川の自然環境：捉えにくい事象の視覚化

III. 研修を学び・企画する

9. 環境教育教員研修プログラム開発—教師のニーズに沿った研修づくり
10. 環境教育教員研修をデザインする
11. 環境教育教員研修モジュール型教材を活用した研修プログラム

資料

モジュール1「国際教育協力と国際社会における環境教育の現代的課題」

日本の国際教育協力において、環境教育は協力経験の浅い分野の一つと見なされているが、今日の教育支援の世界的動向と環境教育のそれとは密接に関係しており、相互理解を図ることによってより実効性のある取組が期待される。この研修では国際教育協力と環境教育の公的文書をテキストにして、両者の基本的な方向と考え方について学習する。

モジュール2「環境教育実践の振り返りと環境教育カリキュラムの開発」

各自が直接間接的に実際に取り組んできている環境教育に関わる取り組みを、整理する機械とするとともに、それらの取り組みを相対化、総体化する機会とする。そのような振り返りを基にして、今後の環境教育実践の範囲や方向性を探る機会とする。

モジュール3「環境教育実践とナショナル・カリキュラム」

環境教育の実践を組み立てていく際に、ナショナル・カリキュラムとの対応を日本と途上国の事例から学ぶ。そして自らの赴任先において子ども・保護者・地域の実情に即しながらそのナショナルカリキュラムに沿った教育実践、特に学際的な統合カリキュラム（クロス・カリキュラム）を考える。

モジュール4「基本的な環境のケア—子どもたちと何をめざすのか？—」

R. ハートが『子どもの参画；コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』において展開している「基本的な環境のケア」というコンセプトを取り上げ、まずその基本的な理解を求めたうえで、そのコンセプトで研修参加者が自分史をふりかえったとき何が見えてくるのかを検討し、最後に途上国の子どもと環境とのかかわりを見る視点について全員で意見交換を行う。

モジュール5「〈語り〉からの教材編成；環境教育デザインのための一視点」

環境教育の教材編成において、これまで環境情報提供者の〈語り〉がどのように位置づけられてきたかを学びながら、〈語り〉からの教材編成にかかわる可能性と問題点とを作業＋プレゼンテーション＋ディスカッション＋ふりかえりを通して検討する。

モジュール6「地域環境を地図化する—まち歩きのすすめ」

資料が少ない、あるいは経験が乏しい新赴任地での環境教育実践を想定して、自力でできるプログラムである地図づくりのノウハウを学ぶと共に、環境地図づくりを野外観察やまち歩きと連動させ、環境資産の発掘や、地域の課題・魅力発見などにつなげる積極的位置づけを考える。

モジュール7「地域の自然環境を読む」

日本とは異なる生活環境・自然環境のもとで環境教育実践を組んでいく際、この研修で自然環境を観察する視点を教師自らが学びながら、子どもたちの活動を考える契機とする。

モジュール8「河川の自然環境：とらえにくい事象を視覚化する」

河川の自然環境を構成する事物や事象について整理し、フィールドでの把握が難しい事物や事象にはどのようなものがあるのかを再考する。また、途上国の現状をとりあげ、実際の現場の問題について

て、河川本来の特性と人為的影響との関係について整理しながら分析し、そこに含まれる、とらえにくさについて確認する。次に、イラストレーションや映像による表現の特徴を学び、具体的なテーマをとりあげて視覚化が有効と考えられる事象とその表現方法について提案し合うとともに、途上国での環境教育におけるイラストレーションや映像の導入方法や活用における課題について議論する機会とする。

モジュール9「環境教育教員研修プログラム開発－教師のニーズに沿った研修づくり－」

政治・経済・社会・文化という外部条件や学校教育制度・教員研修制度という内部条件にも目配りした教員研修全体の枠組みを見取った上で、日本における環境教育教員研修の具体的な事例に学びながら、環境教育教員研修の作り方を示していく。

モジュール10「環境教育教員研修をデザインする」

子ども主体の学習や自ら学ぶ力を伸ばす教育を考える際に、それに関わる教師や指導者自身が自らの学びを創りあげられるかどうかは、重要である。そこで、教師個人の研修と学校全体の研修を参加者全員で計画することを経験しながら、研修デザインのための一視点を獲得できるようにする。

モジュール11「環境教育教員研修モジュール型教材を活用した研修プログラム」

環境教育教員研修モジュール型研修教材は、10のモジュールから構成されている。モジュール型教材の特徴として、共通のテーマを持ちながら(環境教育教員研修)、それぞれが独立した教材である。「環境教育教員研修用モジュール型教材を活用した研修プログラム」では、この教材を活用して、幾つかの用途に合わせたサンプルプログラムを例示している。

今ここにいる私から環境教育を立ち上げる

この研修教材は、私たち一人一人が環境とかかわり合うことによって得る体験をベースにして、環境教育活動の過程を作り出し実践するアプローチを採用している。

環境に心を向ける・環境に出会う・環境をみる・環境を読む・環境に気づく・
環境に心を配る・環境を語る・環境を・にきく・環境を表現する・環境を伝える

環境教育ではこのようなことがとても大切なことだと考え、モジュール型教材では、これらをどのような方法で具体化し環境教育活動の過程を作り出すことができるか、さまざまなヒントが述べられている。今ここにいる私から環境教育が立ち上げられることを願って。

連絡先

国立大学法人東京学芸大学 環境教育実践施設
環境教育「拠点システム」構築事業研究グループ
担当：原子・叶田

e-mail:atom@u-gakugei.ac.jp kanouda@u-gakugei.ac.jp